

# 多文化関係学会ニュースレター

第 17 号 2010 年 6 月



Japan  
Society for  
Multicultural  
Relations

多文化関係学会

<http://www.js-mr.org/>

## ■目 次

2010 年（第 9 回）年次大会について	2
大会委員長からの挨拶	2
大会概要(プログラム予定)	3
大会発表応募要項	5
石井米雄先生追悼	6
2009 年度第 3 回理事会議事録	9
自著紹介	10
地区研究会報告	関東 12      関西・中部 13
地区研究会案内	14
新入会員紹介	17
Web 管理委員会より	18
事務局より	18
編集部より	20

## ■CONTENTS

2010 Ninth Annual Conference	2
Message from the Conference Chair	2
Conference Program (draft)	3
Call for Papers	5
Memorial for Professor Ishii Yoneo	6
Board Meeting Minutes from the Third Meeting of 2009	9
Author's Report	10
Regional Meeting Report	Kanto 12      Kansai・Chubu 13
Regional Meeting Announcements	14
Introducing New Members	17
From the Webmaster's Committee	18
From the Business Office	18
Editor's Notes	20

2010 年度年次大会について  
【開催日】 10 月 16 日（土）および 17 日（日）  
【会場】 常葉学園大学（静岡市）

【大会テーマ】  
生活文化のグローカリゼーション  
“Glocalization in Daily Life”



ただ今研究発表を募集中です。ふるってご応募下さい。  
（応募要項はp. 5をご参照下さい）  
締め切りは 7 月 24 日（土）（必着）です。

大会委員長挨拶

多文化関係学会 第 9 回年次大会へのご招待

清 ルミ（常葉学園大学）

多文化関係学会（JSMR: Japan Society for Multicultural Relations）の第 9 回年次大会は、来る 10 月 16 日（土）、17 日（日）に常葉学園大学で開催されます。大会前日の 15 日（金）には、プレカンファレンス・ワークショップも同大学にて実施されます。

今年度の大会テーマは、「生活文化のグローカリゼーション」（“Glocalization in Daily Life”）です。グローカリゼーションとは、発想は地球規模でありながら、活動は地域的とする概念ですが、我々の日常生活において、その概念がどのように具現化されているか、あるいは将来的にされうるか考察することを主なねらいとします。大会第 1 日目は、食文化を中心に展開します。食文化の地域性は、伝統的な生活文化の結果ですが、食をめぐるグローバル化の波により、地域的食文化はどのように変容し、維持されているのかを探ります。第 2 日目は、地域社会における国際化を取り上げます。内なる国際化は、各地域に根ざした慣習や価値観にどのような変容を迫っているかを再考します。本大会にご参加いただくことで、会員皆様の日頃の研究成果を発表していただくとともに、静岡というローカルな場において、“スロー”に意見交換し交流を深めていただければと願っております。

大会第1日目の招聘講演は、食文化論がご専門の米屋武文氏（静岡文化芸術大学教授）に、「世界の食糧事情における日本の役割 - コメの利活用 - 」と題するご講演をいただきます。米屋氏は米粉による麺、パンの製造（特許）において地域産業に寄与されておられる方です。パネルディスカッションでは、「食文化による交差・交流」というテーマで、お茶、スパイス、魚の3人の専門家をパネリストにお迎えし、それぞれのお立場から見た食の交流について話題提供していただきます。第2日目は、オープンフォーラム「地域社会における多文化共生の課題」を開催いたします。静岡県は、日系ブラジル人をはじめとして在住外国人が多く暮らしている県です。その県内において、地域住民と在住外国人との狭間で仲介役を担っておられる4人のパネリストから現場の課題を発表していただき、地域における多文化共生のあり方について掘り下げて議論していきたいと考えております。また、大会前日のプレカンファレンス・ワークショップでは、「社会構成主義版グラウンデッドセオリー研究法ワークショップ」と題し、質的研究法の方法論、進め方や留意点について具体的に解説していただきます。なお、第1日目の懇親会では、静岡の食をテーマに、地産地消の地域文化のメニューでお楽しみいただこうと企画いたしております。静岡で昔から食されているイルカ料理も登場する予定です。

開催校の常葉学園大学は、JR静岡駅からバスで30分のところに位置しております。高等学校規模のごくこじんまりとした大学ですが、大会準備委員一同、会員の皆様へのおもてなしの気持ちは大きく、ご参加を心よりお待ちしております。皆様お誘い合わせの上、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

## 2010年度 年次大会・概要

### 【大会テーマ】

## 生活文化のグローカリゼーション

### “Glocalization in Daily Life”

#### ●10月15日（金）大会前日

プレカンファレンス・ワークショップ(申し込み先着順30名迄) . . . . . 13:30 - 16:30

#### 「社会構成主義版グラウンデッドセオリー研究法ワークショップ」

講 師：抱井尚子氏（青山学院大学国際政治経済学部教授）

#### ●10月16日（土）大会初日

研究発表1 . . . . . 10:00 - 11:05

研究発表2 . . . . . 11:20 - 12:25

総 会 . . . . . 13:20 - 13:50

招 聘 講 演 . . . . . 14:00 - 15:30

#### 「世界の食糧事情における日本の役割ーコメの利活用ー」

講演者：米屋武文氏（静岡文化芸術大学文化政策学部教授、農学博士）

司 会：竹中智泰氏（常葉学園大学教育学部教授）

パネルディスカッション . . . . . 15 : 45 - 17 : 45

**「食文化の交差・交流」**

パネリスト：小泊重洋氏（茶学の会会長）「お茶は単なる飲み物か？－文化と効能」  
渡辺達夫氏（静岡県立大学食品栄養科学部教授、農学博士）

**「スパイスと健康」**

石川智士氏（東海大学海洋学部准教授、農学博士）

**「魚の価値はどう決まる？－日本と東南アジアの比較から」**

コーディネーター：清ルミ氏（常葉学園大学外国語学部教授）

謡と鼓の夕べと懇親会 . . . . . 17 : 45 - 20 : 00

謡と鼓：江月会

●10月17日（日）大会二日目

研究発表3 . . . . . 09 : 30 - 10 : 35

オープンフォーラム . . . . . 10 : 50 - 12 : 40

**「地域社会における多文化共生の課題」**

パネリスト：堀ひさの氏（浜松市外国人学習支援センターチーフコーディネーター）

水口パズ氏（磐田市役所外国人情報窓口相談員）

山田ミン氏（静岡県ベトナム人協会会長）

マハラジャン・ナレス氏（法廷通訳者）

コーディネーター：谷誠司氏（常葉学園大学外国語学部准教授）

研究発表4 . . . . . 12 : 40 - 14 : 00

ポスターセッション . . . . . 13 : 40 - 15 : 40

○会場：常葉学園大学(<http://www.tokoha-u.ac.jp/web/>)

・JR静岡駅よりバス30分またはJR草薙駅よりバス15分、バス停より徒歩5分

○参加費

◎事前申し込み（2010年9月30日（木）までに振り込み）の場合

正会員2500円、非学会員3500円、学生会員1000円、学生非会員1500円

◎上記期間以降・当日受付の場合

正会員3500円、非学会員4500円、学生会員1500円、学生非会員2000円

◎プレカンファレンス・ワークショップ（9月30日（木）までの事前受付のみ）

正会員1500円、非学会員2000円、学生会員1000円、学生非会員1500円

◎懇親会費

正会員4000円(当日5000円)、学生会員2000円(当日2500円)

大会詳細・入会申し込みは、学会ホームページへ：<http://www.js-mr.org/>

## 2010 年度年次大会・発表応募要項

1. 発表テーマ：本学会の趣旨に沿ったもので、未発表のものに限ります。
2. 発表時間：30 分（発表 20 分、質疑応答 10 分）
3. 申込締切：2010 年 7 月 24 日（土）必着
4. 申込要領：A4 サイズ用紙 1 枚に次の 7 点を明記し、電子メール（添付）とハードコピー（郵送）を大会準備委員会宛にお送りください。
  - （1）発表タイトル（申込後の変更は認められませんので、ご注意ください。）
  - （2）発表者全員の氏名と所属
  - （3）発表概要[500－600 字]
  - （4）多文化関係学との関連性[約 200 字]（内容がどのような点で多文化関係学と関連するのか簡潔に記してください。）
  - （5）本学会の関連主要研究領域（社会・心理・言語・コミュニケーション・地域間研究）から 1 領域を明記してください。
  - （6）発表形式：次の 3 つから選択してください。
    - ①口頭発表
    - ②口頭発表（学生単独による発表。石井米雄奨励賞対象。下記 7 を参照）
    - ③ポスターセッション
  - （7）発表者の個人情報（氏名・所属・職位・専門分野・連絡先住所・電話・電子メールアドレス）
5. 発表者の決定：発表申込書は大会委員会で審議し、採用となった発表者には 8 月 2 日までに電子メールで連絡します。
6. 抄録原稿の提出：発表予定者は8 月 31 日までに発表内容の抄録原稿を下記の宛先の大会委員長に送ること。A4 サイズ 2～4 枚。ワードで作成し、横 40 字、縦 30 行とする。文字の大きさは 10.5～11 ポイント、日本語の文字は平成明朝、または MS 明朝、英語の文字は Times New Roman を使う。提出は、電子メールにより添付ファイルで送付すると同時に、ハードコピーを大会準備委員会に折目をつけずに郵送する。（この用紙は大会当日『第 9 回年次大会発表抄録集』として参加者に配布します。）
7. 学生による単独発表の場合は、石井米雄奨励賞（学生研究発表奨励賞 1 件 2 万円 5 名以内）に応募することができます。応募希望者は発表申込時に「石井米雄奨励賞応募」と明記してください。発表申込時に希望を明記していない場合は、審査の対象になりませんので、ご注意ください。審査、発表については発表決定者に詳細にお知らせ致します。
8. 発表応募資格：当学会員であり、2010 年度の会費納入が資格となりますので、会費納入状況を HP 上でご確認ください。

### 大会準備委員会の宛先

住 所： 〒420-0911 静岡県葵区瀬名 1-22 -1 常葉学園大学 清ルミ研究室内  
多文化関係学会・大会準備委員会

メールアドレス： jsmr2010tokoha@gmail.com

電 話： (054) 261-1474、261-1483（研究室直通）

# 石井米雄先生追悼



## 石井米雄先生を偲んで

久米昭元（立教大学）

2月13日夕刊の訃報欄を目にした時、一瞬我が目を疑った。そんなはずがない。あり得ない…。しばらくの間そのような思いを禁じることができなかった。というのも、石井米雄先生といえば、ハンドジェスチャーたっぷりで流れるように熱弁を振るわれていた元気潑刺な姿しか思い浮かばなかったからである。外務省タイ大使館勤務、京都大学教授、同大学東南アジア研究センター所長、上智大学教授、神田外語大学学長、など華々しいポストを歴任された先生は、教授職を退官後も日本文化研究センターや民族博物館、歴史博物館など国立の研究機関を束ねる人間文化研究機構の機構長としての役割をはじめ、国立公文書館アジア歴史資料館館長など要職を沢山抱えつつ、当学会でも強い指導力を発揮され、学会の顔として、獅子奮迅の活躍をされてきた。先生が当学会の発足から現在までなされた貢献の数々の中から、主だったもののみエピソードを交えながらここで紹介し、先生の学会でのご活躍を偲びたい。

石井先生には、2002年に発足した当学会の初代会長として2期4年間務めていただき、学会の基盤固めをお願いした。その後、学会顧問を経て、2009年4月からは再び理事の任についていただくなど、設立以来まさに「学会の支柱」としてご活躍いただいた。今後の地球社会に不可欠の多文化関係学を是が非でも発展させるという強い意思を持たれた先生は、年次大会でもそのカリスマ的な存在感を発揮されていた。例えば、基調講演や司会では既存の学問的枠組みに縛られない自由な発想を開示され我々は大いに啓発された。また、オープンフォーラムでは不思議なことに、議論が袋小路に陥った瞬間、さっと会場に現れ、ご自身の深い異文化体験に基づくエピソードを交えながら刺激的なコメントをし、しばらくするといつの間にかその場から消え去るという、人類学者ならではの軽いフットワークで、行動力と発想力を持ち続けることの大切さを我々に教えてくれた。

石井先生の貢献は、このような表立った活躍だけではない。まず「石井ファンド」の設立があげられる。「石井ファンド」とは、多文化関係学の発展と後進の学者の育成に寄与したいという趣旨から寄せられた石井先生個人の寄付金のことである。学会ではそれを優秀な若手研究者への

奨励金として毎年使わせていただいている。また、会員相互の研鑽に基づく意見交換の場として「ホラロジー（ホラを吹く方法で喧々諤々と議論すること）の会」を提唱され、ご自分で何度も範を示された。現在でも、各地区研究会などでそのスピリットは取り入れられ、実践されている。地区研究会での発表者を当学会では「話題提供者」と名づけているのも、遠慮のない自由闊達な意見交換ができてこそ、多文化関係学の発展を見ることができるといふ先生の強い思いが反映されている。

2011 年秋に開催される 10 周年記念年次大会時に出版を予定している『多文化社会日本の諸課題（仮題）』（明石書店）の冒頭には、石井先生のメッセージを掲載させていただき予定にしていたが、それもかなわぬこととなり、無念でならない。余りにも突然に、かけがえのない先生が他界され、学会員の喪失感は計り知れない。それだけに、先生の強いご意思を胸に刻み、これから益々学会発展のために尽力せねば、と心を新たにす日々である。

## 石井米雄先生を偲ぶ

小林登志生（総合研究大学院大学名誉教授）

私が、JSMR 初代会長、元神田外語大学長、元ユネスコ国内委員会会長の石井米雄先生の訃報に接したのは、今年 2 月に開催された日本ユネスコ国内委員会定例会議の席上でした。石井先生は、上記以外にも多くの要職をお務めになられ、学会多方面に多大な足跡を残し広範に影響を与えた先生ですが、尊大なところは少しもなく、飾り気のない、内面からにじみ出る優しさと徳を備えた奥行き深い方でした。特に、後進の育成には心を配られ、私なども公私共にいろいろアドバイスをいただき、超ご多忙の身でありながらお願いすれば私が企画した研究会等でも気軽にテーマに合った軽妙かつ深遠なお話しをしてくださいました。思い起こすと、JSMR 立ち上げにあたり発起人たちが、当時久米現会長がブリティッシュ・ヒルズで主催しておられた異文化コミュニケーション・セミナーの後パブで気炎をあげた席にも参加され、まさしく磊落な京都学派の重鎮らしい、“既存の定説に挑戦し、仮説を戦わせ、それにより心理に迫る”という自説に基づき応援くださり、初代会長職も快くお引き受けくださいました。古き良き時代の学者として偉大な業績を挙げ、大学・学会運営にも尽くされ、実り多い人生を全うして逝かれた大先輩のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## The Memorial Event for Ishii Yoneo and Ishii Hiroko

John E. Ingulsrud（明星大学）

On Monday, March 22, a memorial event was held in Tokyo's Chiyoda City at the Gakushi Kaikan. The venue was a large room, rectangular with a vaulted ceiling. On one side were a long altar with flowers

together with a table of books and memorabilia. On the other side were tables set for a buffet. There was sushi and sandwiches, and fish, beef and rice kept warm in chafing dishes. In the center, there were several round tables with glasses on them. Was this a funeral or a party? For those who knew Ishii-sensei, they could imagine that he would have insisted that any memorial to him would have to be accompanied by food and drink. People would recall the late-night gatherings in his Kyoto University days and the sherry parties during his tenure as President of Kanda University of International Studies (KUIS). Yet, this was a public event with hundreds of people.

I sensed that I was not the only one bewildered when entering the venue. Some people wore formal black and while others were dressed for a conference dinner; we were encouraged to take a chrysanthemum stem and offer it to the altar. This, each of us did. Then we joined the crowd. It was announced that they had prepared for 270 people but in fact over 330 attended. As the proceedings began, I noticed that former Prime Minister Fukuda was in attendance and made a brief visit. Three speakers described the work stages of his life, beginning with his sojourn in Thailand, living in a monastery and learning the language. A former Foreign Office official spoke about his work in the embassy culminating in his service as translator for Prime Minister Ikeda. A former colleague spoke of his contribution to area studies, particularly South-East Asian studies. This contribution was most significant during his 25 years (1965-1990) at Kyoto University. A former student described the period when he retired and joined the Center for Asian Studies at Sophia University in Tokyo. Later, he served as President of KUIS, and it was during this time that he began sponsoring informal summer workshops at British Hills in Fukushima Prefecture. These workshops served to provide the initial members and the core ethos for our Japan Society for Multicultural Relations. Since 2004, he had been a member of numerous boards and had continued his own writing.

At the end of these three speeches, we were asked to fill our glasses. This was not to be a *kampai*, but a *kempai* 'offertory toast'. We raised our glasses to Mr. and Mrs. Ishii, but did not drink "bottoms up". Most of us took a sip. No one clinked glasses. Slowly people began to help themselves to the food and pour more drinks. A video based on Ishii-sensei's book *Michi wa Hirakareru* was shown. This was followed by numerous speeches of students and colleagues of his various associations. Those who wanted to listen to the speeches gathered to the front of the room, while those who were enjoying each other's company stayed to the back of the room. The party feeling increased as time went on.

Finally at the end of the event, the eldest son, Ishii Tadashi was asked to speak. As he began, gradually the room became quiet. This was not just because a family member was speaking, but it was due to the rhetorical power of his speech. He spoke using examples from his own life to shed light on the nature of both his father and mother. He spoke how his mother, Hiroko, had been a secretary for a President of a large company and she was featured in a magazine in 1955. Her efficiency in business affairs helped manage the family finances through some of the difficult transitions in her husband's career. Her interest in cooking served to make the evening dinner a focal point of family life. His father also took dinner seriously and occasionally gave his wife a rest by cooking for the family himself. There were frequent guests, particularly from abroad. It was at these times that he imparted his wisdom. He encouraged everyone to read and shared his joy at discovering new things even from a dictionary. The father talked how he himself who was not a researcher, through discovering the joy of meeting new knowledge, became a researcher. He said in life it is



fine to stumble and fall. The important point is to be careful and strategic in how you get up. More recently, he encouraged a friend who had an injury, to view the white ceiling of a hospital room as a place for discovery.

Ishii Tadashi further explained that it was during a family dinner that his father announced that the family would move to London. Ishii-sensei took an opportunity to study Burmese in London and told the children that they would study English. Learning another language was not new to the Ishii children. They had grown up in Thailand and were thus native speakers of Thai. Coming from a family with professionals in Japanese dance and *rakugo*, learning a new language was not considered to be a daunting task, but was simply assumed to be attainable.

The family extended their family dinner, not only with the food at the event, but, providing for us to take home, Mr. and Mrs. Ishii's favorite curry. They also gave us some *yōkan* for dessert. The point was loud and clear: Persevere all of you, but not alone. Encourage each other by eating and drinking together.

## 2009 年度 第 3 回多文化関係学会理事会議事録



日時：2010年3月13日(土) 12:00-15:00

場所：立教大学13号館1階会議室

出席：〔敬称略、順不同〕：青木、赤崎、浅井、イングルスルー、抱井、久保田、久米、河野、  
小松、清、松田、松永、八島、李

欠席：〔敬称略、順不同〕：石井（敏）、田崎、松井、渡辺、林

記録：赤崎

### 【報告事項】

1) 前回議事録確認

2) 2010年度大会準備

テーマ、プレカンファレンス、基調講演、パネルディスカッション、オープンフォーラム

3) 事務局

- ・学会費入金状況報告
- ・収支報告
- ・会員登録抹消（住所・Eメールアドレス不明かつ会費未納）

4) 学会誌第7号

- ・特集号進捗は順調
- ・八島智子理事が編集委員会に加わる

5) ニュースレター

- ・16号：目次英語化・新入会員紹介を開始
- ・NL英語化窓口：イングルスルー副会長
- ・17号：石井米雄先生追悼文掲載（担当：久米会長、イングルスルー副会長、松井理事、小

林登志生会員)

### 【審議事項】

#### 1) 2010 年度大会

- ・ポスターセッションと発表のランク付け意識をなくし研究発表の場として充実させる
- ・広報・収支担当の大会担当理事選出（久保田、抱井、小松各理事）

#### 2) Web 英語化プロジェクト

- ・目的：学会広報及び多言語による発表機会提供による多言語会員の増加
- ・範囲：トップページ
- ・新ニーズの窓口：イングルスルード副会長

#### 3) 「在日特権を許さない市民の会（在特会）」の暴力的活動への対応

「多文化」「異文化」「移民」を研究テーマにしている他の組織と連携を組み、在日外国人の子どもや老人に対して暴力をふるうような人権侵害に対する現状把握を実施する。

#### 4) 北海道・東北地区研究会委員長交代

伊藤現委員長在外研究のため長谷川典子会員に交代

#### 5) 地区研究会の運営方針

- ・地区研究会のポリシー：議論・研究発表の場の提供
- ・費用規定明文化を推進

#### 6) 事務局保管書籍

神田外語大学異文化コミュニケーション研究所に保管を依頼

#### 7) 企画委員会

- ・議論・懇親目的の合宿セミナー実施を継続審議
- ・会員名簿の発行・会費納入請求早期化の提案

#### 8) 第 11 回年次大会

2012 年度は関西地区開催を目指し継続審議

## 自著紹介



### ■会員の著作図書案内■（出版年順、下線部は情報提供者）

★小坂貴志 (監訳)ジュアン・アントニオ フェルナンデス・ローリー・アン アンダーウッド『チャイナCEO—多国籍企業 20 社のCEOが語る中国体験と助言』、バベルプレス、322 頁、2008 年 9 月。

▶中国という異文化マーケットでどう勝ち抜くか。中国でビジネス展開する多国籍企業 20 社のCEOと 8 人のコンサルタントへのインタビューが明かしたその秘訣。

★荻原稚佳子『言いさし発話の解釈理論—「会話目的達成スキーマ」による展開』春風社、340 頁、2008 年 10 月。

▶「言いさし発話」を人々がどのように解釈を行っているのかについて、実際のインタビュー対話を使って分析を行い、人間が内在的に持っている「会話目的達成スキーマ」に基づき、発話解釈理論を展開・実証。

★宮脇和人・細川隆雄著『鯨塚からみえてくる日本人の心』農林統計出版、281頁、2008年12月。

▶日本には多くの鯨塚がたてられた。主として江戸・明治期のものだ。日本人はどうして鯨塚をたてたのか。現地調査によって、その理由をさぐる。

★松田陽子『多文化社会オーストラリアの言語教育政策』ひつじ書房、298頁、2009年4月。

▶多文化主義を掲げるオーストラリアが、移民・先住民の言語・文化の尊重と経済的効率性を追求する中で、多言語教育を推進する言語政策を策定した過程や教育現場の変化を分析。

★岡村圭子分担執筆——第2部第5章、増谷英樹編『移民・難民・外国人労働者と多文化共生——日本とドイツ／歴史と現状』有志舎、233頁、2009年5月。

▶ドイツはなぜ「移民受入れ国」に転換できたのか。日本はなぜ躊躇し混乱しているのか。移民との多文化共生はどのようにして実現できるのか。

★松永典子「多民族社会における異文化間理解教育—『旧満州』の人材養成を事例として—」、萬美保・村上史展編『グローバル化社会の日本語教育と日本文化』、ひつじ書房、309頁、2009年7月。

▶当時の人材養成の理念・方法論に、「文化理解」の必要性の認識がありながら、なぜ多民族共生の理想が破綻したのか、教育の功罪両面から破綻の要因を分析。

★灘光洋子分担執筆、藤崎和彦／橋本英樹編『医療コミュニケーション：実証研究への多面的アプローチ』篠原出版新社、161頁、2009年12月。

▶医療コミュニケーションの特徴が整理されているほか、異なる学術領域（社会言語的分析、機能的分析、会話分析、ナラティブ分析、異文化的アプローチなど）で展開されてきた医療コミュニケーション研究の理論的背景、研究手法、研究事例、課題や可能性を多面的に紹介。

★細川隆雄・岸本喜樹朗編著『食べることは人生充実の自己実現だ』農林統計出版、301頁、2010年1月。

▶2007年多文化関係学会全国大会でのフォーラム「食のせめぎあいと多文化関係」の報告ならびに議論をベースに編集された。食文化多様性の必要性を指摘し、鯨文化の発掘・普及の重要性を提起。

★馬越恵美子・桑名義晴編著『異文化経営の世界：その理論と実践』白桃書房、314頁、2010年3月。

▶経営のグローバル化に伴い、日本企業でも多文化の人々が働くようになり、そのマネジメントが大きな関心を集める今日、理論的研究と企業の事例により、異文化経営の様々な課題に迫り、日本企業に対してインプリケーションや提言を試みる。



### ■関東地区研究会

日時：2009年3月13日（土）（15:30-18:20）

場所：立教大学池袋キャンパス 13号館 1階会議室

テーマ：「大学で文化をどのように教えるか：授業と研究方法について」

#### How to Teach University Students Methods of Researching Different Cultures

話題提供者（1）能智正博氏（東京大学）

#### 「質的分析の教育—異文化のテキストを読む姿勢を教える」 Education of Qualitative Analysis: Teaching an Attitude of Reading the text from Different Cultures

今回の関東地区研究会のテーマは「大学で文化をどのように教えるか」というものであったが、「質的分析」という講演タイトルのためか、大学で教鞭を取られる先生方だけでなく、質的研究に取り組む大学院生の参加も多く見られ、「質的研究」がさまざまな分野で関心を集めていると改めて感じた。能智先生は、質的研究をどのように進めて行くか、質的研究を進めるにあたって何が重要か、学生や院生の指導という視点からわかりやすく解説してくださり、ご講演後にはさまざまな立場から質問が寄せられた。

言葉とは単なるコードではなく、文脈によって多義性を持つため、質的分析のはじめの段階では、文脈の中のデータに向き合いテキストを自由に読むことが大切となる。2、3人のグループでブレイン・ストーミングしながら気になる点を見つけ、さらにデータと対話しながら理解を深めるうちに、読み手の側も（胃袋が大きくなり）変化していくという。したがって、自分の枠組みの変化を記録することも必要となる。質的分析では、このようなテキストとの対話（「解釈学的円環」）が基本となることを納得した。

後半では、学部と院における先生の授業の様子をご紹介くださったが、中でも「ラベリング評価ゲーム」という一種の協同学習が印象に残った。グループに分かれ、各ラベルについて4人が一斉にAからDのカードで評価を下す。このようにして他人の評価を知ることは、良いラベリングとはどういうものか、学生が考えるきっかけになるという。

今回の先生のご講演で、質的研究ではあくまでデータと真摯に向き合うことが大事であり、一見地味に見える質的研究だが、データととことん「戯れる」ことによって、ダイナミックな視点の移動という研究の醍醐味を味わえることを教えていただいた。

また、統計は質的研究の基礎であり、質的研究は統計からの逃げ道ではない、という先生のご指摘を私達院生は忘れてはならないと思った。

文責：津田ひろみ（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科院生）



話題提供者（2）田中共子氏（岡山大学）

「質的心理学研究を用いた文化の研究手法とその指導」**The Research of Culture Using Qualitative Psychological Method and the Education for the Students**

岡山大学の田中共子先生は、研究管理と研究法の指導に関する御自分の教育実践の要点とプロセスを、集まった会員に対して惜しみなくまたエネルギッシュに披露してくださいました。

まず、文化を文脈性のある磁場として捉えると、文脈性の解読に向いていてかつ既存の研究系譜から離れた発見に焦点をあてやすい質的研究は文化研究との親和性が高い、という認識からお話が始まった。その前提にもとづき、実際の学生指導では、学生の志向と能力を考慮し量的研究と質的研究のどちらかの適切な研究法を提示し、たたき台に基づいた添削を指導の基本型とされているとのことである。

論文作成過程全体の指導プロセスも説明され、学生が明確な「地図」をもって研究にあたるのが可能になるシステムを田中先生が提供されていることがわかる。学生が全体図を把握できるよう論文作成から掲載までのプロセスを可視化する、論旨の構成を図やアウトラインとして描かせる、論文に題をつけ論旨の明確化を図る、研究実現性に関しては忌憚ない見解を示し学生にありがちな研究万能感をコントロールすることなどが示された。

田中先生のお話は情報量が多くここにとても全てを書くことはできないことが残念だ。学生の指導にあたる者にとって非常に具体的かつ示唆に富み、お話し下さった田中先生に感謝申し上げると同時に、教員が自身の教育プロセスを振り返り言語化して次の指導に活かすことの重要性を再認識した機会でもあったことを読者の皆様にお伝えしたい。

文責：赤崎美砂（淑徳大学）

◆-----◆  
**■関西・中部地区研究会**

日時： 2010年2月28日（日）

場所： 龍谷大学・大阪梅田キャンパス

テーマ：「二極化する日本の多文化共生の実情」

**Polarization in Japan's Multicultural Situation**

話題提供者（1）藤井幸之助氏（神戸女学院大学非常勤講師）

「日本における民族排外主義団体の最近の活動について」

**Recent Activities of Intolerant and Anti-Foreign Organizations in Japan**

話題提供者（2）花立 都世司氏（大阪市社会教育主事）

「自治体における外国籍住民施策について～大阪市の事例をもとに」

**Policies of Local Governments Regarding Foreign Residents: Examples from Osaka City.**



話題（１）では、「在日特権を許さない市民の会（在特会）」と呼ばれる団体による、朝鮮学校に対してヘイトクライムさながらの暴挙が映像を通して紹介された。在日コリアンの子どもたちが学ぶ朝鮮学校に拡声器を持ったグループが押しかけ、マイクの大音響で「スパイの子どもたち」「朝鮮学校を日本からたたき出せ」と拡声器で怒鳴り散らす暴挙の映像はショッキングなものであった。

社会背景として、不況や、政権交代後、在日外国人の地方参政権に関する議論が本格化したことが考えられる。また、政府は、高校授業料を実質無償化する予定をしているが、朝鮮学校を対象から排除すべきという意見があり、政府や国会で議論が起きていることも考えられる。研究会では、朝鮮学校のカリキュラム内容について質疑応答があったが、ヘイトクライムさながらの行動に対して、断固とした姿勢を取らない姿勢こそ問題であるという意見が参加者から出た。

話題（２）では、多文化共生推進のための大阪市の多様な施策が紹介された。外国籍住民施策として、大阪市では、「国際交流や国際協力を通じて世界へ貢献するまち」の実現をめざし、国際化施策の推進に取り組んできている。市域に居住する外国人は地域社会を共に構成する「外国籍住民」であるという観点から、いわゆる「内なる国際化」、「共生社会の実現」という課題が国際化推進のための一つの柱になっている。1994年11月に「大阪市外国籍住民施策有識者会議」（以下「有識者会議」）が設置され、国際化に対応した総合的な外国籍住民施策のあり方について、専門的な見地から意見交換、調査、検討などが行われている。一般の人たちが理解しやすい啓発資料として大阪市の住民を100人村にたとえた色彩豊かな統計資料が作成され、国際結婚や外国にルーツをもつ子どもたちの増加が視覚的に理解できる内容となっている。

文責：李洙任（龍谷大学）

## 地区研究会のご案内

### ★2010年度 第1回北海道・東北地区研究会★

日時：2010年8月9日（月）15:00-17:45

会場：北星学園大学（Hokusei Gakuen University）

話題提供者（１）：石黒武人（Taketo Ishiguro）

テーマ：「多文化関係研究における対話的構築主義アプローチの有効性と限界」

#### **Effectiveness and Limitations of a Social Constructionist Approach to Multicultural Relations Research**

概要：発表では、対話的構築主義に依拠したライフストーリー・インタビューを扱う。ライフストーリー・インタビューとは、個人を様々な社会関係の集積の場と仮定し、インタビューを通じて調査協力者と調査者が相互行為的に構築するストーリー（言語的表象）を手掛かりにして、調査協力者の認識世界とその背景にある文化を理解しようとする質的研究法である。個人の認識形成やインタビュー場面での言語化において不可避的に介在する、多様な社会・文化・歴史的諸関係（多文化関係）を捉える上で、こ

のアプローチが持つ有効性と限界について論じる。

プロフィール：明海大学外国語学部英米語学科専任講師。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程修了（異文化コミュニケーション学、2008年）。主な研究対象は、多文化組織におけるコミュニケーション。

話題提供者（2）：河原歳也（Toshiya Kawahara）

テーマ：「メディアの役割と今日的課題：ジャーナリズム日米比較再考（報道の現場から）」

**Role of News Media and Current Issues: Comparison of Journalism in Japan and the United States**

概要：ジャーナリズムはいずれの国においても民主主義の社会を守るために権力を監視し、真実の報道を目指すという大きな役割を果たしている。国によっては文化的、歴史的背景が異なるように、組織としてのニュース・メディアの在り様も違っている。ニュース報道の現場から眺めて、日米の報道記者やジャーナリズムの現状について比較再考してみたい。具体的には、ジャーナリストの身分職種、政治的中立性、記者クラブ制度などにあらわれる日米の差異に焦点をあてて問題提起したい。

プロフィール：大阪生まれ。University of Minnesota 大学院MA修了。ジャパントイムズ編集局報道部・英文記者、編集デスクを経て日本経済新聞・英文日経編集部デスク勤務。現在は、北星学園大学文学部・英文学科教授。

参加費用：無料

申込み先：北星学園大学 長谷川典子（hasegawa@hokusei.ac.jp）

（研究会終了後、懇親会を予定しております）

★2010年度 第1回関東地区研究会★

日時：2010年7月3日（土）15:00 - （予定）

場所：立教大学（12号館地下1階第4会議室）

テーマ：「文化 接触におけるアイデンティティポリティクス」

**Identity Politics and Intercultural Encounter**

話題提供者1：平山修平（青山学院大学）Shuhei Hirayama (Aoyama Gakuin University)

発表テーマ：「医師と患者のポジショニング」

**Physician-Patient Positioning in Their Face-to-Face Communication**

話題提供者2：石川准（静岡県立大学）Jun Ishikawa (Shizuoka Prefectural University)

発表テーマ：「テクノロジーとアイデンティティ」 **Technology and Identity**

★2010年度 第1回中国・四国地区研究会★

日時：2010年12月4日（土）13:00 - 15:00（予定）

場所：岡山大学・文化科学系総合研究棟・総合演習室2（予定）

（交通案内：<http://www.okayama-u.ac.jp/user/hss/access/access.html#koutuu>）

テーマ：「第二言語、第三言語の使用と異文化適応」

### **Bilingual or Trilingual Ability and Cross-Cultural Adjustment**

話題提供者：シミッチ・ミラ・山下(岡山大学社会文化科学研究科研究員)

東欧のセルビア出身で、現在日本に在住し、日本語と英語を用いて心理学の研究活動を展開中。ベオグラード大学卒業後、岡山大学にて言語と異文化適応の関わりを研究し、博士(文化科学)を取得。母語はセルビア語で、英語にも堪能であり、来日後に日本語を習得したトリリンガル。

概要：在日留学生を対象とした、「第二言語としての英語、第三言語としての日本語」と異文化適応との関係を、WTC (willingness to communicate：意思疎通しようとする意志) の観点から解き明かす一連の研究を、まとめて発表して頂きます。そして異文化滞在における言語の役割について皆で議論し、今後の研究展開への論点や展望を共有していきたいと思えます。発表は、日本語と英語を併用します。質疑やコメントは、日本語の場合は少しゆっくりご発言頂ければ助かりますし、英語でなさっても結構です。

参加費用：無料(終了後の簡単なお茶会：200円 別途)

申込み方法：担当者 田中共子(たなかともこ)([tomo@cc.okayama-u.ac.jp](mailto:tomo@cc.okayama-u.ac.jp))まで。

ご参加希望の方は、11月26日(金)までに、メールでご連絡下さい。心理、日本語教育、英語教育、留学生教育、コミュニケーションの分野の方を中心に、多文化間の対人関係と言語の関わりに関心のある方、ご参加をお待ちしております。若手や学生の方が研究のヒントを探したり、ネットワークを作ったりするきっかけとしても役に立ちたいと思えます。地区会員以外の方も、どうぞおいでください。

## ★2010年度 第1回九州地区研究会★

日時：7月10日(土) 14:00-17:00

場所：九州大学伊都キャンパス比文・言文教育研究棟第8ゼミ室

[http://scs.kyushu-u.ac.jp/modules/pico/index.php?content\\_id=36](http://scs.kyushu-u.ac.jp/modules/pico/index.php?content_id=36)

テーマ：「グローバルリテラシー(国際対話能力)の実践と検証」

### **The Application and Verification of "Global Literacy"**

話題提供者：谷雅徳(関西大学客員教授、書道家 俵越山) Masanori Tani(Kansai University)

概要：グローバルリテラシーとは何か、その本質を問いかけるDVDを鑑賞し、異文化・異言語間でも強力なメッセージを発することができる方法論とはどのようなものか、また、言語教育において、グローバルリテラシーを身につけさせるにはどうしたら良いのか、ともに議論したい。

参考記事：書道家『俵越山』の谷雅徳氏は、越前屋俵太時代の、一般の人をテレビに開放した創発と日本語の通じない世界各国への日本語による突撃取材レポートを通して、ハイブリットな効果を生むコミュニケーションには何が必要かを示された。コミュニケーションには笑いや面白さなど何か楽しいものが必要で、何かそういうプラスアルファがあって初めて躍動するコミュニケーションが可能になり、しかもそれによって本来のメッセージが確実に伝わることを突飛もない実例によって示された。<多文化関係学会第8回年次大会パネルディスカッション「力動するコミュニケーション——笑い・メディア・ICTを通して」報告者小林路義(鈴鹿国際大学名誉教授)『多文化関係学会ニューズレター』第16号p5より転載。>



参加費：無料。研究会後に懇親会を予定しています。懇親会費 2,000円程度。

申込方法：担当者（松永典子 [mnori@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:mnori@scs.kyushu-u.ac.jp)）までご連絡ください。氏名、所属、メールアドレスを記入のうえ、タイトルに「九州地区研究会申し込み」と記入してください。懇親会参加の有無に関してもお知らせください。

問い合わせ先：九州大学大学院比較社会文化研究院 松永典子

E-mail : [mnori@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:mnori@scs.kyushu-u.ac.jp)

TEL : 092-802-5629

\*各地区の研究会案内の詳細についてはウェブでご確認下さい。

## 新入会員紹介

(敬称略)



会員資格	氏名	所属	研究分野等
一般	Keehyeung Lee	Kyung Hee University	Cultural Studies, Politics of Identity
一般	猿橋 順子	青山学院大学国際政治経済学部	社会言語学/異文化間コミュニケーション
学生	坪井 睦子	立教大学大学院	社会語用論系翻訳研究/メディア翻訳論
学生	金 恩愛	中央大学大学院	社会科学 (市民社会、政策など)
一般	北出 亮	拓殖大学	国際ビジネスコミュニケーション
一般	岸本 喜樹朗 (裕一)	桃山学院大学総合研究所	エンターテインメント・ビジネス
一般	森 雄二郎	聖泉大学短期大学部	人間文化/多文化共生/国際理解教育
学生	アルファロ フランシスコ	大阪大学人間科学研究科	教育
一般	米倉 律	NHK放送文化研究所	メディア研究/公共放送研究
一般	ペク ソンス	神田外語大学	メディア文化/メディアコミュニケーション/ 異文化コミュニケーション
学生	内田 さやか	早稲田大学大学院	国際関係学/多文化共生/異文化間コミュニケーション
学生	メルビン ハバー	立命館アジア太平洋大学	Japan and Philippines
学生	柳 美佐	京都大学大学院	継承語教育
学生	宗田 勝也	同志社大学大学院、難民ナウ!	コミュニティメディアによる難民支援
一般	辻 隆久	近畿大学	キャリアデザイン/異文化コミュニケーション/労務管理
学生	藤 美帆	九州大学大学院	異文化間教育/日本語教育/異文化コミュニケーション
一般	加藤 優子	仁愛大学人間学部 コミュニケーション学科	異文化間教育/異文化コミュニケーション
一般	伊佐 雅子	沖縄キリスト教学院大学/大学院	異文化適応/コミュニケーション哲学/沖縄文化研究
学生	平野 純子	ルーテル学院大学	臨床心理学

(2009年10月19日～2010年5月14日現在)

## Web 管理委員からのお願い

(Web 管理委員長 河野 康成)

### 会員専用サイトでのご所属・ご住所等の変更

ご所属・ご住所や e-mail アドレスなど登録事項が変更された方は、多文化関係学会ホームページの学会員専用サイトにて登録情報をご変更下さい。なお、ID およびパスワードがお分かりにならない方は、河野 (kono@rikkyo.ac.jp) 宛にご連絡下さい。

#### ・登録情報変更手順

1. 多文化関係学会ホームページ (URL: <http://www.js-mr.org/>)
2. 学会員専用サイト (会員番号・パスワードを入力し、ログインボタンを押す)
3. 登録情報更新をクリック
4. 変更点を修正して、一番下の更新ボタンを押す

## 事務局より

### \*4月より新事務局体制に変わりました

以下に新事務局住所を記載します。

多文化関係学会事務局

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院大学 (青山キャンパス) 国際政治経済学部・抱井研究室内

E-mail : [admin@js-mr.org](mailto:admin@js-mr.org)

### \*学会 10 周年記念出版企画への投稿は 3 月 31 日をもって締め切りました

ご投稿いただいた皆さま、ご協力ありがとうございました。

### \*今年度も学会費納入をお願い致します

同封の郵便局「払込取扱票」にお支払いいただく会費の年度、及びお振込み金額をあらかじめ記入していますので、金額等ご確認の上お振り込みいただくようお願いいたします。

(申し訳ありませんが、払込料金(手数料)の支払いにつきましては会員の皆様の方でご負担をお願いいたします。また種別の変更などありましたら、事務局へご連絡ください。)

### \*「新刊学会誌 (ジャーナル)」の配布方法

学会誌は、毎年 3 月頃学会員の皆様に配布しますが、自動的に配布するのは学会費支払い済み会員 (当該年度) のみが対象となります。したがって、3 月末以降に学会費をお支払いいただいた方には、事務局から個別に「新刊学会誌」を郵送しています。なお学会誌の会員価格は 2,000 円です。

### \* 会員の皆様へ！ 大学図書館への「学会誌」紹介のお願い！

本学会は 2007 年 9 月に日本学術会議の「協力学術研究団体」として認可され、その称

号を受けました。したがって、学会誌の投稿論文も公的に認められ、さまざまな形で学術的な引用頻度が高くなってきました。この為、学会の財政基盤の一助となる、「全国の大学図書館への紹介と販売プロジェクト」にぜひご協力とお力を下さい。なお大学図書館などへの販売価格は、3,150円で、連絡先は以下のとおりです。

- 連絡先：古賀哲夫（担当者）
- 担当部署：丸善株式会社、国内仕入部（ブックネット S.C.）
- 住所：〒103-8244 東京都中央区日本橋 3-9-2
- 電話番号：(03) 3273 - 1042 <Fax：(03) 3273 - 1043>
- E-mail：t\_koga@maruzen.co.jp

事務局より  
**学会員のための学会活動参加の手引き**  
 諸活動についての情報は、すべて学会ホームページ（HP）<http://www.js-mr.org/>に  
 掲載されています。

活動の種類と概要	対象	連絡・問い合わせ
1. 学会活動全般について知る [学会の目標、沿革、組織、年次大会・地区研究会などの情報、学会誌、ニュースレター、ホームページ利用法、学会費支払い状況などの確認]	会員・非会員	学会広報委員会・Web管理委員会 (jsmrweb@ml.rikkyo.ac.jp)
2. 学会誌へ論文等を投稿する	会員のみ	学会誌編集委員会 委員長 田崎勝也 (jsmrsubm@js-mr.org)
3. 年次大会に参加する	会員・非会員	1. 学会 HP 2. 第9回年次大会については大会委員長 清ルミ (rsei@tokoha-u.ac.jp)
4. 地区研究会に参加する 関東地区は年2回、 その他の地区は年1～2回	会員・非会員	北海道・東北：長谷川典子 (hasegawa@hokusei.ac.jp) 関東：浅井亜紀子 (asai@obirin.ac.jp) 中部・関西：李洙任 (lee@cwo.zaq.ne.jp) 四国・中国：田中共子 (tomo@cc.okayama-u.ac.jp) 九州：松永典子 (mnori@scs.kyushu-u.ac.jp)
5. 学会費の支払い状況を確認する *会員番号とパスワードが必要	会員のみ	1. Web管理委員長 河野康成 (kono@rikkyo.ac.jp) 2. 事務局長 抱井尚子 (admin@js-mr.org)



★学会情報★

《日本コミュニケーション学会》

第40回年次大会  
2010年6月19日-20日  
明治大学

《異文化コミュニケーション学会》

SIETAR Japan - 第25回年次大会  
2010年10月30日-31日  
文京学院大学

《日本心理学会》

第74回年次大会  
2010年9月20日-22日  
大阪大学

《日本語教育学会》

秋季大会  
2010年10月9日-10日  
神戸大学

★「民族排外主義団体による人権侵害」についての現状把握について★

春季中部・関西地区研究会で、藤井幸之助氏（神戸女学院大学非常勤講師）が報告されましたように、最近民族排外主義団体による人権侵害が深刻になりつつあります。日本では人種差別撤廃制度が整備されていないため、在日外国人の子どもや老人という弱者をターゲットにした非人道的な行為が見られるようになりました。2009年度第3回多文化関係学会理事会では、問題提議がなされ、審議した結果「異文化」や「移民」を研究テーマにしている組織と連携を組み、現状把握を実施することが承認されました。関心がおありの会員は、李洙任（龍谷大学）までご連絡ください。lee@biz.ryukoku.ac.jp

編集部より

地球温暖化の影響でしょうか、落ち着かない天候が続いておりますが、多文化関係学会会員の皆様におかれましては、お忙しくもお元気でご活躍のことと存じます。NL17号をお届けいたします。今回は、常葉学園大学で開催される第9回年次大会のお知らせと共に、本学会にとってもなくてはならない存在であられた石井米雄先生の追悼文を掲載させて頂きました。NL委員会メンバーも、まだ慣れず至らぬ所があるかと思いますが、お気づきの点等ございましたらご連絡ください。今後ともよろしく願いいたします。

(NL委員会：松永典子・大谷みどり・古谷真希)